

統一したビジュアルイメージで 大学の研究発表をブランディング

鈴木敏彦 / 首都大学東京システムデザイン学部インダストリアルアートコース准教授

首 都大学東京システムデザイン学部
に、一昨年、インダストリアルア
ートコースが新設された。それにともな
い、これまでの研究シーズ発表会を、ア
ートとエンジニアリングの融合という観
点から一新することになった。このプロ
ジェクトを担当するに当たって、今まで
の科学技術交流会を既存ブランドととら
え、新たにブランド価値を再定義し、シ
ンボルマークのデザインをはじめ総合的
なアクションプランを構築した。

つまり、研究成果を“商品”とするブ
ランディングである。具体的には、シス
テムデザインフォーラムというネーミング、
シーズ（種）が新芽となり飛躍する
シンボルイメージ、新緑のイメージカラ
ーなどを決定。さらに、イベントのパン
フレットから研究優秀賞のトロフィー製

作、会場設計に至るまで、統一したビ
ジュアルアイデンティティーに基づいて展
開することによって、明快なブランドイ
メージの構築を目指した。

会場は、45センチ立方の白い段ボ
ールの箱を350個使って構成した。段ボ
ールには、シンボルやプログラムの詳細
を緑色のカッティングシートで貼り付
け、受付や仕切り壁の機能を持たせた。
サインとしての効果が絶大だっただけ
でなく、1日限りのイベントをダンボール
箱の組み立て、設置、たたんで撤収とい
う、分解組立型のプロセスによって短時
間で達成できたことに、参加者からは高
い評価が寄せられた。

プログラムの目玉は、グローバルベ
ンチャーセッションという新企画である。
広く学外の研究者が最新的话题を提供

し、宇宙工学、ロボット知能化、ネット
ワークサイエンスなどのテーマの下で有
益な情報交換、意見交換を行った。

インダストリアルアートコースでは、
長田謙一教授の「Arteの新たな統合/
バウハウスの照らす方へ」というテーマ
のもと、柚田佳穂・ミサワ・バウハウス
コレクション学芸員、水越伸・東京大学
大学院情報学環准教授、小林真理・東京
大学大学院准教授の3人のゲストスピー
カーを招いてセッションを行った。それ
は、20世紀初頭にアートとエンジニア
リングの融合を目指したバウハウスを再
考し、アート&デザインの新たな可能性
を開く未来への意思表示であった。

エンジニアリングをアートの視点から
ディレクションすること。それは、シス
テムデザインフォーラムのブランドの体
現であると同時に、本学インダストリアル
アートコースが担う役割でもある。多く
の参加者からは「従来の研究発表会よ
りも、印象が明るくなった」という声
が寄せられた。



昨年12月6日に秋葉原ダイ
ビルで開かれた「システムデザ
インフォーラム in AKIHABARA
2007」。統一したイメージで
研究発表をブランド化した



photo : sadamu saito
illustration & design : shino suefusa
design : takeo ainoya
art direction : toshihiko suzuki